

細胞が発生する時期を同定することで、歯の再生研究に有用な材料になりうると考えられた。  
結論：iPS細胞由来奇形腫は様々な組織の発生過程を調べる上で有用なツールであると考えられた。

#### 演題4. Dalhousie University での高次臨床研修を通して

○守口万里子

岩手医科大学歯学部6学年

2010年3月2日より、Canada, Nova Scotia, HalifaxにあるDalhousie UniversityのOral and Maxillofacial Surgeryにて、2週間の高次臨床実習に参加させて頂きました。Dalhousie Universityは創立1818年、学生数1万5千人、卒業生からは2人の総理大臣や赤毛のアンの作者、宇宙飛行士等を輩出している由緒ある大学です。歯学部は1908年に創立され、学生総数180人程に対して、教員数はAssistant Professorまでで90人、インストラクターを含めると120人以上となるそうです。学校の特長として学生に対する教員数が多く、2年半の臨床実習期間に学生一人当たり平均で55人程の患者さんを受け持つ事があげられます。また学校内のオンライン化がとても進んでいました。

実習は、現地学生と同じ口腔外科のローテーションに参加させて頂きました。実習初日、自身の知識の無さを心配し教科書や辞書を手術室のラウンジまで持参したのですが、先生から「心配しなくて大丈夫、学生なんだから今は細かい術式や名詞ばかり気にするのではなく、もっと目の前で行われている事を感じとって欲しい。」と仰って頂き、本を置いて目の前で行われてる事に集中する事ができました。顎整形術、口唇口蓋裂口唇形成術、顎裂部骨移植、トラウマ、口腔外科外来、入院病棟、講義受講等、朝は6時からの回診、週末は同級生達との交流等、目紛しい毎日でしたが、5年生での臨床実習の総まとめとして、自分自身への新たなチャレンジとして、とても有意義な2週間となりました。

この実習を通し強く感じた事は、今の日本の医療システムでは、カナダの学生と比べ日本の学生が実際に患者さんに触れる事は、確かに難

しい環境にあります。しかし私たち岩手医科大学の学生に与えられた講義、実習室、学生に対して情熱的な先生方といった環境は、何も劣っていないということです。岩手医科大学で学んだ知識は世界の歯科界で十分に通用するのです。歯科医師国家試験合格率の低下、卒業後の進路など、現在歯科医師を志している者の多くは不安を抱え学生生活を過ごしていると思います。私はこの経験を通して、歯科医師という職業そして母校への誇りを新たにすることができました。

#### 演題5. 当科で行われてきた頭頸部領域への超音波検査について

○東海林 理, 泉澤 充, 佐藤 仁,  
高橋 徳明, 星野 正行, 齋藤 圭輔,  
小豆嶋正典

岩手医科大学附属病院歯科医療センター  
歯科放射線科

目的：当科で1984年に超音波検査が開始され2010年6月で検査件数が1万件に達した。そこで、これまで使用した超音波装置の変遷について調べ、過去10年間に行われた検査について統計的に分析した。

##### 1. 装置の変遷

・最初にRT-2000, 次にRT-2600が導入された。これらはグレースケール画像の表示しかできなかった。

・1996年にLOGIQ 500が導入された。この装置より血流をカラー表示する「ドプラモード」が搭載され、画像のデジタルデータとしての保存が可能となった。

・2009年にLOGIG P5が導入された。機器のコンパクト化と液晶ディスプレイによる画像の鮮明化がはかられ、データのハードディスクへの保存とUSBによる出力が可能になったことが特徴である。

##### 2. 統計学的分析

対象・検討項目：2000～2009年の間に当科で超音波検査を行った4422件を対象として、件数の年次推移、年齢分布、外来と入院の件数の比較、良性疾患と悪性疾患の件数の比較、および